

Title	楊絳の散文 その3：「忘れられない一日」と「啓明で学ぶ」
Sub Title	Two essays by Yang Jiang part 3 : The unforgettable day, My schooldays at Qiming Girl's School
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.16 (2023.) ,p.83- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20230331-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊絳の散文 その3

——「忘れられない一日」^①と「啓明で学ぶ」^②——

櫻庭ゆみ子訳

はじめに

楊絳（一九一—二〇一六）は、代表作の一つ『幹校六記』^③刊行以降、七十歳代にして堰を切ったように小説、散文、批評、翻訳等、多岐にわたるジャンルで旺盛な執筆活動を繰り広げた。敬愛する父親についてすでに邦訳のある回想録、『回憶我的父親』^④もそういった最も脂ののった時期に書かれたもので、父に愛された娘ならではの身内の視点から反骨の精神たくましい弁護士であった父、楊蔭杭の^⑤人となりを浮かび上がらせている。ただそこでは楊蔭杭の死をめぐる具体的な情況は省略されていた。今際の際に間に合わなかった悔しさと悲しみの深さが記述をためらわせたのかもしれない。その後八十歳を過ぎた一九九七年三月、脊椎癌の発見から一年と経ずして娘が逝き、翌年十二月、長く病床にあった伴侶、錢鍾書が^⑥逝く。自らも病を抱え老病死が迫る人生最後の段階にあって楊絳は

『パイドン』を英語から重訳し、エッセイを書き続け、と執筆の手を緩めることはなかった。今回紹介する「忘れられない一日」は、そういった状況にあった楊絳が、『回憶我的父親』発表から実に十数年を経て記した父の死にまつわる顛末である。父の病の報を受けた楊絳たち兄弟姉妹が急ぎ蘇州にバスで向かう道中の描写では、いつものユーモアをにじませた筆致は健在ながら、底を流れる悲哀の情は心を打つ。日本軍の蘇州侵攻によって交通路が遮断されたために苦渋する人々の姿には、侵略を受けた側の過酷な現実と戦争の愚かしさが示しだされている。私たち日本人が知るべき歴史の断面でもある。

もう一篇「啓明で学ぶ」は、父、楊蔭杭が娘たちのために選んだ啓明女学校⁸での寄宿生活を語ったもので、かわいがってくれたシスターや教師、幼き学友たちと共にあった日々を懐かしむ思いにあふれ、幼き日の楊絳のお転婆ぶりが生き生きと描き出された味わい深い回想録となっている。同時にまたこの作品は、民国時期の教会学校における女子教育の一端を知らしめる貴重な歴史の証言にもなっている。⁹号令に合わせて動く体操の時間の描写をはじめ、集団生活における日々の生活の詳細な記述があるのだが、時間を細かく規定し効率的に物事を処理していく「近代」なるものの行動様式及び思考形態になじむ身体がいかに形作られていったか、身体的矯正を伴う学校教育の場での近代化の過程の一つの具体例が示されているともいえる。¹⁰そしてまた個人の記憶の記述と歴史的出来事の重層する関係性の考察へと視野を広げる興味深い視点を提供してくれるものでもある。データベース資料¹¹により、楊絳が寄宿生活を始めた一九二〇年の「啓明女校章程」を読むことができるので、必要な箇所をその都度注として挙げておく。尚、「我在啓明上学」は原文で二万字を越す長さがあるため、回を分けて掲載する予定である。

単語についての注は脚注とは別に「」で該当の単語の下に付した。訳文中の（ ）は楊絳本人の説明である。

忘れられない一日

一九四四年冬、アメリカ軍が上海に絨毯爆撃を行うといううわさが巷で盛んにささやかれた。上海に避難してきた人々が今度は次々と逃げ出していく。父は大姐と三姐、彼女の夫の全家族を連れて蘇州の廟堂巷の家に戻った。私たち夫婦と娘の阿圓、それから学校に寝泊まりしていた一番下の妹の楊必、そして眼科医だった弟はまだ上海に残っていた。

一九四五年三月二十六日の午後五時頃に弟が突然電話をよこし、蘇州から大姐が長距離電話で父が病気だからすぐに蘇州に来るようにと言ってきたという。それですぐ私と阿必に知らせたのだ。当時上海は日本軍の占領下であり、列車の切符は入手困難だった。翌日の切符を手に入れることなど論外である。即刻蘇州に戻るには長距離バスしかなかった。電話で尋ねると、バスは蘇州に行くとは限らず、切符は問い合わせ当日に買う必要があるという。阿必が私の家に来て一晩泊った。二十七日の早朝、空がぼんやり明るくなった頃、小雨のしよほ降る中を私と阿必は粥を数口そそくさとすすり、それぞれ小さなバッグを片腕に下げ、出がけに小型の魔法瓶とビスケットの包み一つを持ち、傘をさして一緒に玄関を出ると人力車で待ち合わせ場所の停車場に向かった。弟はもう早くから来ていた。まだ七時前だった。私たち三人は朝一番で切符を買うつもりだった。

停車場には続々と人々が集まってきた。皆蘇州に行こうとしていたが、バスが出るのかどうかも、切符の購入場所も知らされない。停車場と言っても車庫の前をセメントで固めたがらんとした空き地である。一帯が泥と新旧の痰でいっぱいだった。私は熱い湯の入った魔法瓶を提げていたが、それを置く場も見つけられない。バッグももち

ろん提げているしかなかった。

切符を購入しようという者がどんどん増え、地面の痰も少なからず増えた。切符販売の窓口がどこなのか、まだわからなかった。大勢の人々の中で、ほんやりと立っている者もいれば、ぐるぐる歩き回っている者もあり、誰もがイラつき焦っていた。八時近く、突然数人が現れ、車庫を開けて販売開始、と宣言した。とは言うものの車庫の奥に小さなテーブルが置いてあるだけで、つまりそこが切符売り場だった。

皆は私たち三人が一番早く来たことを知っており、優先して前方に押し出してくれたので、私たちは蘇州行の切符を三枚買うことができた。大勢が押し合いへし合いしていたが、だれもが、それもかなりの速さで切符を購入することができた。その後ぐわーんという大音響とともに車庫から古びた大型トラックがでてきた。車輪が十ついている。前後がダブルタイヤ、真ん中がシングル、二枚の帆布が天蓋として使われている。トラックの荷台には前から後ろへ数本の鉄の棒が渡してあり、その鉄の棒の上を帆布で覆っているのである。トラックの上には全部で四列の長椅子が置かれている。それぞれ両側にひとつずつ、真ん中に背中合わせで二つ。乗客がどっと乗り込んだ。私たちは急いで傘を閉じ、ぎゅう詰めめの車内に乗り込むと、なんとかわきの長椅子に座る場所を見つけることができた。たくさんの人間がワイワイガヤガヤ次々に乗り込むのを見て、トラック一台にこんな大勢が乗り込めるものかと心配になった。長椅子が一杯になっても二列の通路がまだ空いている。長椅子には仕切りがないので、できる限り詰めることができた。通路も詰めるだけ詰めることができる。こうしてついに大勢の人間すべてが車内に収まった。二枚の帆布の隙間から雨がしたり落ち、トラックの両側からも吹き込んできた。幸いにも少々ばらつく程度で雨は間もなくやんだ。皆はともかく乗り込むことができて、少しばかり安堵していた。

グラグラッと車が揺れたが、どうも動けないようである。もう一度何度か揺れ、そしてようやく動き出した。こ

うしてトラックはゆっくりと走り出した。それほど走らぬうちにまた止まる。動かなくなったのではなく、大きな麻袋を二つ積み込むためだった。一つは臭気のある塩漬け魚の袋、もう一つは砂糖の袋だった。どちらも蘇州市内で人気の物のようである。麻袋は長椅子の下に押し込まれたが、椅子よりも幅があったため通路にはみ出した。乗客はやむを得ずさらに詰めるしかなかった。男性の乗客は頭上の鉄棒につかまることができた。女性の乗客は背が低いので座っている乗客の方に寄りかかるしかない。座っている乗客は脚を斜めに曲げてできる限り隙間ができるようにした。一人の女性が私の肩を支えにし、一人が私の椅子の背中の板に手をついた。トラックが再び動き出した。

上に下に右に左にと揺れに揺れたが、トラックが動いているのであれば構わなかった。乗客の緊張も少し緩み、互いに言葉を交わし始めた。葬儀に駆けつける者もいたが、身内が急病になったケースが最も多く、婚礼を挙げるために帰郷する婚約者のカップルが一組だけあった。トラックは上海を出て荒涼とした郊外の公道を走る。私はふいに都市にいるときの守られた感じがなくなったことを実感した。空からは日本軍の戦闘機がいつ何時爆弾を投下するかわからない。警報などあるはずがなかった。道中トラックの前に立ちはだかり略奪を行う匪賊もいる。ぎゅう詰めの車内の乗客たちは、それこそ艱難に身を寄せ合う家族のような感覚になっていた。

トラックはのろのろと進む。私はしょっちゅう時計を見た。八時前後に出発して今九時になろうとしていたが、まだそれほど距離を行っていなかった。人が多すぎて車体が重すぎるのだ。えんこせずして儲けもの、といったところ、いったい何時になったら蘇州にたどりつけるのか見当もつかなかった。私たち三人は何とか座席に腰を下ろしていたが、トラックが上下左右に揺れるので、立っているものはそのたびにバランスを失い倒れないように精一杯踏ん張った。

突然前方に木の橋が現れた。トラックはさらに速度を緩め、橋の前で止まると、乗客全員に降りて橋を渡るよう指示が出された。橋は日本軍によつて破壊されていた。運転手は一人二人の助手と一緒に、長さがまちまちの木の板を破壊された場所にあてがった後、空のトラックをゆっくりと走らせた。そして橋を越えたところで乗客が一斉に乗りこむ。今回は私たちは座席を確保できず、立っているしかなかった。

上海から蘇州まで、公道にどれだけの橋が架かっているかわからなかったが、それらがすべて木造で、すべてが日本軍の攻撃で壊されていた。破壊の程度が一様ではなかっただけだ。いずれにしろ橋に差し掛かるたびにトラックから降りねばならず、乗ってからの座席の有無はその時々で入れ代わった。皆は疲労困憊のまま押し合いへし合い車を降り、そして押し合いへし合い乗車する。焦り怯える者、泣きだしそうな者、気がかりで心がいつぱいの者、気落ちしたため息をつく者等々、言葉を交わしても苦しみが吐露されるばかりだった。恥ずかし気に笑みを漏らす婚約者同士のカップルだけが、喜びの雰囲気を経験し出し、車内を覆った重苦しい気分を和らげていた。

私も弟も妹も一心に案じていたのは、父さんは何の病気なのだろうかということだった。大姐が弟に急ぎ戻るよう命じたということは、何かの病に違いないのだが、私たちの誰もが言い出せないでいた。十二時ごろ、私たちはうまい具合に席に座ることができ、乗客たちは菓子類を食べ始めた。お腹がすかない、と阿必に尋ねると、「そういわれたとたんほんとお腹がすいた」と阿必が答えた。弟は水を飲みたいという。私たちは魔法瓶の蓋のカップで湯を飲み、ピスケットも分けて食べ、そしてまたガタンゴトン揺られて、何度も中断される旅の途に就いた。橋にさしかかる度に皆はドヤドヤガヤガヤと下車し、難儀をしてトラックが橋を越えると、またドヤドヤガヤガヤと押し合つて乗り込む。前方にはまだ橋があるだろうかと気をもみながら。

ついに橋が無くなった。橋げたもろともに。路が途絶えたのだ。時刻は午後三時を過ぎ、すでに太倉まで来てい

た。地元の間人によると、前方にある二つの橋も壊されているという。二箇所であれ三箇所であれ、ともかく橋が壊されてしまったならばトラックは前進できない。太倉は蘇州からほど遠くない¹⁶。しかし道が絶たれてしまつてどうやって前に進めというのか。

婚約者たちの目的地は太倉だった。列車は太倉を通らないので、路線バスに乗ることになる。二人は悦び勇んでトラックを降りて行つた。他の乗客もたくさん降りた。人力車を雇うことにした者、親戚のところを寄せようという者、自分で歩いてゆくのだという者もいた。こういった人々が入り乱れて車を降りたあともトラックの周りをうろろとしていた。長距離トラックはすでに七時間余り走つてきている。迷っている時間などない。運転者は直ちに上海に戻ると宣言した。どこにも行きようがない者は車内にとどまるしかなかった。私たち三人のほかにも四、五人の乗客がいた。

上海に戻る時分には十時か十一時になっているはずだ。夜間トラックが公道を走るとき、ライトをつけていれば敵機に見つかった際必ず爆撃される。ライトをつけなければ河辺に突つ込むこと間違いなしだ。暗闇のなか、壊された橋を渡る時に踏み外しでもしたらどうしよう、乗り込むのが間に合わなくて振り落とされたらどうしたらいいんだらう。なにはともあれ、車内はガラガラで、ゆったりと座ることはできた。私は長椅子の一番後ろに陣取つた。下車した乗客が道の脇により、トラックは下車しなかつた乗客を乗せてぐるりと向きを変えると、やって来たときふるまいをがらりと変えて、逃亡するかのよう突つ走つた。左右に上下にと大きく揺れながら来た道をひた走る。たちまち橋のたもとにやって来た。ところがトラックは止まろうとせず、フーツ、フーツ、フーツと一気に橋をこえてゆく。この橋はまだほぼ原形を残したものだ。運転手はまるで命を賭けるかのように橋を一つまた一つと突破し、全く止まろうとしない。当初橋を越える時も荷台は空だったはずなのに、あれほど難渋し、あれほ

ど慎重にやっていた、それが今、やけっぱちの勢いで、崩れ落ちそうな橋ですら猛スピードで走り抜ける。目の後の後輪のダブルタイヤの四分の三は空に浮いていた。トラックが川岸の平地でひっくり返り、私が車の下敷きになっているような感じだった。誰もがびくつき、ぎよつとし、息を殺していた。叫び声をあげる者は誰もいなかった。トラックは必死で走る。ガタンゴトン、ぐらりゆらり、フーッ、フーッ、フーッと一気には走り抜けてゆく。トラックには臭う塩漬けの魚の麻袋、砂糖の麻袋、そして金銭もあるかもしれない。だいいちトラック自体が金になるし、女性も四、五人乗っているのだ。いつ何時道々待ち構える匪賊に出遭うかも知れなかった。暗くなるまであとわずか、しかしライトをつけることはできない。空には敵機が旋回している。だから運転手は死に物狂いになって猛スピードですつ飛ばす。そしてなんと、トラックは何事もなく無事に痰と鼻水でいっぱい^①のセメントを敷いた駐車場に戻ったのだ。まだ六時にもなっていないかった。

まるで夢の中にいるようだった。トラックを降りると、私たち姉妹と弟はそれぞれ車を雇って家に戻った。私と阿必は人力車に並んで座りながら、胸がどきどきして茫然自失状態だった。

① うちに着いた。誰が扉を開けてくれたのか覚えていない。ヒステリックな口調で泣き笑いするように「丸一日走って、また戻ってきちゃった」と声を絞り出したことだけは覚えている。

居間は人でいっぱいだった。姑、叔父、叔母それから年のいった子供から幼い子供たちまで、誰もが厳粛な面持ちで、まるで私たちが一日無駄にして戻ってくるのを待っていたかのようにだった。私はぎよつとなつた。鍾書が近づき私の手を取ると、皆から少し離れた暗がりへいざなつた。阿必も後ろからついてきた。鍾書がゆつくりと静かに言った。「なつき蘇州から電話があつたんだよ。父上が亡くなられたんだ。」

緊迫した、そして自分ではどうすることもできなかつたこの一日の最後を締めくくつたのは、耐え難い悲しみだつた。

二〇〇一年十月十日

啓明で学ぶ

十歳の時、私は一端の大人になつたつもりだつた。実際は満でまだ八歳半だつたのだが。一九二〇年二月のことである。大姐は、春学期が始まつたら三姐を上海の啓明に上がらせるために連れていくつもりだつた。そして私も一緒に連れて行きたいと考えていた。当時我が家は無錫にあり、父は危篤状態を脱したばかりで病はまだ癒えていなかった。

父は、前々から、啓明は教育の質が高い、生徒を厳しくしつけ、外国語と中国語双方の基礎を叩き込んでくれる、と教育方針をかつていた。それで二姑母、堂姐、大姐、二姐、とみな啓明で学ばせていた。一九二〇年の二月は、まだ冬休みの最中だつた。大姐はすでに卒業し、教壇に立っていた。大姐は私より十二歳年上で三姐は五歳年上だつた。(八つ年上の二姐は、三年前、啓明に在学中に病気で亡くなつていた)母は私を手放したくなかつたのだが、大王廟の小学校に戻るのを私が拒否したため、自分で決めさせることにしたのだつた。

私のために母は小さなスツケースを用意した。夕食が済んだところで母が「阿季、お前のスツケースを用意しましたよ。取りにおいでなさい」と私を呼んだ。当時無錫ではまだ電灯が普及せずランプを灯していた。母がスツケースをとりにおいでと呼んだ部屋は、ランプすらなく隣の部屋から一筋の明かりがもれてくるだけだつた。

母がもう一度尋ねた。「決めたの?」

「うん、決めた」と私は答えた。

「行きたいの?」

「うん、行きたいの」口ではこう答えながら私はぼろぼろと涙をこぼし、顔がぐしゃぐしゃになった。部屋が薄暗かったので母には見られず済んだ。これまで私は静かに涙を流すことなく、いつも大声でわあわあ泣いていたのに。今度上海の学校に行くとなれば母のもとを離れなければならない。しかもいったん家を離れたならば夏休みまで帰ってくることはないのだ。

私は自分で荷造りをした。出発にあたって母は真新しい銀貨を一枚くれた。これまで私は小遣いなど持ったことがなく、何か買うときは銅銭数枚を母にねだればよかった。この銀貨は母のお饞別、母の思いが込められている。私はそれを肌着の胸左ポケットにしまった。大姐からは赤い花飾りがついたとてもきれいな麻布のハンカチをもらった。私は使うのが惜しくて、小さくたたんで銀貨の連れ合いとして一緒にしまひこんだ。こうして左ポケットが私の宝箱、右側のポケットが普段用となった。下着を取り替えるとき私は二つの宝物を注意深く移しかえた。気候が和らぎ一重の服へ衣替える時に初めて銀貨を姉に預けたが、そのときには銀貨は人肌でほんのり暖かくテクリが出ていた。ハンカチのほうは、とっさの涙拭きに活躍する必需品となっていた。

啓明女学校は当初「女塾」と呼ばれており、名の知れた洋学堂「教会学校」だった。私は啓明に一歩足を踏み入れたとたん、まあなんて立派なところだろう、と感嘆した。そして心の中では大王廟小学校の友達に盛んに自慢していた。「あたしたちの『英文教室』(外国語を学ぶ学生の自習室)はね、大王廟全部合わせたより大きいよ、教室の前の廊下はすっごく長く、東の端から西の端まで行くのに十数部屋も通らなくちゃならないんだから。廊下

にはね、模様をついたタイルが敷き詰めてあるの。廊下の外側は大きなお庭。教室の裏はとっても大きな空き地で大きな木が生えていて芝生になって、空き地をぐるりとね、広い廊下が囲んでいて、それが「雨中体操場」まで続いているの。(これは「大体操場」とも言った。とても広かったからだ)。空き地にはブランコやシーソーもあって……昼間は一階でお勉強して夜になると二階にあがって眠るんだけど、二階の上に三階もあるの。三階はね……」。しかし、まもなく新しい世界にはいりこみ大王廟のことは遙か彼方に遠のくこととなった。

私の新世界は何もかもが目新しかったが、使われる言葉はもつと奇妙だった。新学期が始まってまもなく在校生が戻ってくるとあちこちで一斉に「望望姆姆」^{ワフワフムム}「シスターごきげんよう」の声が上がった。これは「姆姆、こんにちは」という意味である(修道女を姆姆と呼ぶ)。私たちを監督するのは全員が修道女だった。学校は毎月一回休みがあり、この日上海に家がある学生は家の者の迎えて帰宅ができた。この休みの日は「月初めの日曜」と言った。残りの日曜日には制服を着て校章をつけ一列に並び、各列がそれぞれシスターに率いられて郊外や私有の庭園に遊びに行く。これは「跑路」^{パルク}「お散歩。以下この訳語を使う」と呼ばれた。絵を習う者は別に学費を払う必要があった。絵画の種類は油絵、木炭画、水彩画で、専門教育を受けたシスターが教えた。そして絵を描くことを「描花」と言い、ピアノも無粋に「招琴」^{パルク}「お琴ひき」と呼んだ。朝食、昼食、おやつ、夕食を済ませると学生は教室に居残ってはならず、教室の建物の前や裏に遊びに出なければならなかった。これは「散心」^{パルク}「休憩。以下この訳語を使う」と呼ばれた。食事中は話をしてはならなかったが、祝日はそれが許された。これは「休憩のお食事」といった。言う事を聞かない子供は「没志気」^{パルク}「情けない」と言われ、いたずらな子供は「小鬼」^{パルク}「チビ助。以下この訳語を使う」とか「小悪魔」^{パルク}「悪戯っ子」とか呼ばれた。自習のときにトイレに行くにはまず「お許し」をもらわねばならなかった。自習室の教壇には監督係のシスターがいた。「お許し」というのは監督係のシスターに「お手洗い」とか

「ちよつと外へ」と告げることで、シスターが領いてはじめて外に出られた。ただ監督係は外国人のシスターのことが多く、なんとご自分は本を読んでいて視線もあげずに領く。私が時々「お許し」をもらうのに小声で「遊びにいつてきます」と言つてもシスターは領いた。「お手洗い」とか「ちよつと外へ」はよく遊びに抜け出る口実となつた。「お許し」は数人が一斉にとらないように注意して少しづつづらせば、チビ助たち数人が裏の庭でひそかに遊びまわることができた。

私たちチビ助のなかでは全校生徒は三種類に分けられた。「お団子」（まげ）を結いスカートを穿いているのが最上級生（最高学年が第一班なので、第一クラスとも言つた）。このほか五、六人いる女性教師（大姐もそうである）も同じいでたちだつた。一本のお下げを編んでスカートを穿いている（たとえば三姐）のが中級生。お下げが一つか二つにスカートを穿かないのが小級生だつた。実際は、装いは年齢を識別するためのもので級の識別用ではなかつた。「お団子」を結つていても最小クラスかもしれなかつたし、スカートを穿いていなくても中級クラスのものであることもあつた。

私は四本のお下げをしていた。なぜかと言うと、啓明の規則では、学生は顔全部をきちんと出して髪の毛が顔にかけられないようにし、髪はお下げか「お団子」にまとめなければならなかつたからである。私はもともと前髪を額のところを切り揃えていたのだが、この前髪をお下げにまとめるのは容易なことではなかつた。二人の姉が毎朝私の髪をお下げに結つてくれた。右と左に前髪を二つにわけ、それぞれが担当する側をぎゅつとつかんで小さなお下げに編み、それからまだそれほど長くないお下げに編みこんだ。二人が苦労しているのは私は顔をしかめてじつと痛いのをこらえ、二人が力任せに引っ張るに任せながら、早く髪の毛が長くなるようにとひたすら祈つた。四本のお下げを編んでいるチビ助は私一人だけだつたように思う。

私たちは朝から晩までシスターに管理されていた。一日は二つに分けられ、夜が上の階で、昼間が一階、一度階下に下りると夜まで二階には上がれなかった。昼間は誰も上の階に上がってはならなかった。毎日が細かな規則通りに動いていた。けれども私たちはとても活発だったから、シスターの監視の裏をかくやり方を心得ていた。これも日常を豊かにしたが、一方で何もかもに努力が必要で、朝から晩まであらゆる障害を乗り越えてゆかなければならなかった。

毎朝六時に起床のベルが鳴り²⁴ベッドを整え、身支度をする。たしか七時か七時半にベルがなると、並んで階下に下りてゆき、食堂で朝食をとる。それから「休憩」、そして授業。毎日同じ時間割で、日曜日に「お散歩」、水曜日に沐浴が入る。日曜と水曜の時間割は他の日と違っていたが、週ごとの繰り返しは同じだった。昼食は決まって十二時、それから「休憩」、そして又授業。四時半におやつ、それからまた「休憩」、授業。六時か六時半が夕食、それからまた「休憩」、そして夜の授業。チビ助たちの夜の勉強時間は短い。私たちは上の階に上がる前に順番に自習室奥の「おトイレ」で用を足し、それからシスターに並ばされて上に上がる。上の階のベッドルームはたしか四五間か五、六間あった。早朝と夜更けにシスターが見回りに来た。けれども私たちチビ助どもはあちこちの部屋の間をコンコンと動き回ることができた。ただ夜のお勉強の後はチビ助たちも我さきへとベッドにもぐりこんだ。

ベッドルームはとても広く、「突き抜けの部屋」と呼ばれ、どれも全く同じ作りだった。それぞれの部屋の中には左右に分かれ、ベッドの配置も同じだった。四つのベッドが一列に並び、部屋の左右でそれぞれ四列あった。各列の間隔は広く開けられていた。各部屋には一つ独立したベッドが壁際に置かれ、監督者の先生がそこに寝た。私の大姐もこういった独立したベッドに寝た。私のベッドは、大姐のベッドの向かい側、横には頭を並べるように三姐のベッドがあった。

当時私は皮袄「毛皮の裏地のついた上着」に、綿のズボンをはき、上っ張りトズボン覆いを着用していた。服を着るだけで十分面倒だった。当時ズボンのウエストにはゴムバンドは入っておらず、蛇腹に折って腰ひもでおさえなければならなかったからだ。きつく縛りすぎると満腹の時に苦しくなった。緩すぎるとズボンが落ちてしまう。ずり下がってくると裾がだぶつく。大姐は私が縛ったズボンがまっすぐではないと、毎日私の腰ひもを縛り直した。ズボンの裾も左右が揃っていなければならぬ。姉は袖も同じ長さに整えないと気が済まなかった。

最も難しいのはベッドを整えることだった。ベッドのカーテンは昼間は天蓋にたくし上げておかねばならない。私たちのベッドの前にはそれぞれ小さな腰掛が置かれていた。私はまず腰掛をベッドの前の中央に移動させ、その上の上で立つと頭の部分のカーテン二枚をベッドの天蓋までたくし上げる。そして下に降り横側のカーテンを折りたたみ、もう一度腰掛に上がって後ろ側のカーテンと一緒にきちんと平らになるように天蓋に上げる。腰掛はベッドの頭側、足側と何度も動かさねばならない。私はカーテンを実にきちんとたくし上げたので、皆がこぞって褒めた。とても得意だった。

カーテンをたくし引き上げ終わるとベッドを整える番である。毎晩寝る前に掛け布団を小さな「封筒」型にしたが、私は身長がなかったので、「封筒」はとても短かい。長すぎると風が入ってしまうのだ。上級生や教師たちはみな私のベッドのカーテンを開けてこの小さな「封筒」を見るのが好きで、みなで見ても笑った。朝は起きると、まず掛け布団を一枚ずつふるって平らに伸ばし、その上を白い厚手の綿カバーでベッドを覆う。このベッドカバーの両脇は房が付いていた。ベッドの両側に垂れる房の高さは同じでなくてはならなかった。私のベッドは四つ並んだ真ん中で、前側から足元の方に行くにはもう一つのベッド（三姐のベッド）を回らなければならない。私はきちんとしているのが好きだったし、人に褒められるのも好きだった。それで毎朝のように、何度もベッドを大回りし

てようやく満足のいくベッドメイキングになった。

私たちにはそれぞれ専用の小型のロッカーと洗顔用具一式があり、自分用の蛇口を使った。これらの設備は壁沿いに並んでいる。私と姉のロッカーは隣同士だった。毎日、三姐とどちらの洗顔タオルが白いかを言い争った。というのは三姐が私のタオルが黒ずんでいると言ったからだ。私はお風呂で使う粗製の石鹸と洗顔用の薬用せっけんを持っていた。⁽²⁸⁾父が老舗の薬用せっけんが一番殺菌作用があると闇雲に信じており、母が特別に私と姉にそれぞれ一つずつ買ってくれたのだ。ただ私が毎日それを使って顔を洗っているとは夢にも思わなかっただろう。大姐が、顔の高い部分は光っているけれども低い部分がまだ洗えていないと言うので、心して顔の高いところも低いところも洗った。それから耳の前、後ろ、周りと丁寧に洗った。そして首にいく。さらに三姐を見習い、石鹸を塗ったタオルの上を爪を立てて指を往復させ、指の爪もきれいに洗った。すっかり洗い終わると、顔に少し油を塗り、それから髪をばらして二人の姉が四つのおさげを編んでくれるのを待った。ほかの者がどんな石鹸や化粧品を使っているのかは知らないが、私たち姉妹は鏡も持っていなかった。四つのおさげ時代、私は他の部屋に遊びに抜け出す暇はほとんどなかった。しかし、皆で並んで階下に降りるとき、一度冒険をやらかしたことがあった。

建物の階段は幅が広く、わきにとてもきれいな欄干がついていた。欄干の上の手すりの部分は丸みのある、つるつるした木の板だった。私はいつかこの木の板の上を滑り降りてみたいと思っていた。ある時、二階にいたシスターの眼が届かないすきを狙って欄干にまたがり、カーブを滑り降りた。もし身体が少しでもよじれたら、床にたたきつけられていただろう。床は硬いタイル張りで、ブランコの下のように転んでも痛まないのとは違っている。私は二度と滑ろうとはしなかったし、姉にも話さなかった。幸い誰からも告げ口はされなかった。ほかにまだこれかこれをやった者がいたかどうかはわからない。

階下に降りてからは、生徒全員用に居場所が設けられていた。私たちの自習室である。自習室は全校で二つあった。小さいほうは「中文課堂」と呼ばれ長い廊の東端にあり、大教室程度の広さだった。外国語を学ばず中国語だけを学ぶ生徒が「中文課堂」で自習をする。大きいほうの一間は途方もなく広く、そして明るかった。廊下の中ほどに位置し、「英文課堂」と呼ばれていた。外国語を学ぶ者は、英語にしるフランス語にしる英文課堂で自習をした。一人一人の天板の開く机と椅子は位置がきめられており、数年間変わらなかった。書籍や紙、筆、墨、硯及び「手工課」「家庭科」で使う針や糸などはすべて天板の下に収められる。この座席付き天板机がいわば宿舍でのベッドとロッカーにあたった。上階に一つの居場所があり、階下にも居場所があるといったところだ。英文課堂には全部で百余りの座席があった。課堂も左右の二つに分けられ、中間に通り道があり、上手に教壇が据えられ、監督のシスターが座っている。授業、食事、おやつ、或いは散歩の時間以外は終始自習室が活動拠点となった。二階の宿舍のベッドの位置、階下の自習室の座席、食堂のテーブルでの座席はすべて決まっていたので、休暇から戻つてくると自分の家に戻つてくるような感じがした。

階下で初めにすることが食堂に行くかトイレに行くことかどちらだったかはよく覚えていない。ともかくいつもシスターが見守っていた。食堂に出入りする時も、一気に押し掛けたりバラバラに出て行ったりすることはなく、いつも秩序正しく列を作った。その際背の高さにはこだわらず、順序だっていればよかった。

朝食がまた一仕事だった。食堂も左右二手に分かれていた。左と右に半々ずつ、どちらも長いテーブルが横に、全部で二十余り並んでいる。その長いテーブルはまた二つの小型テーブルに分かれ、真ん中に両方の小型テーブルで共有する飯櫃や粥の入った桶、急須や湯飲み茶わんが置かれた。小型テーブルは四人掛け⁽²⁶⁾だった。私は大姐の隣に座り、向かい側に三姐とその友達が座った。朝食はあつあつの硬めの白米の粥で、おかずが四皿ついた。静まり

返った食堂で粥が食される。皆はさっさと粥を食べたが私だけは遅かった。粥は熱いし、それに大姐が必ずお代わりをさせたからだ。シスターは食堂の周囲や中央の通路を行き来した。おしゃべりは許されなかった。誰かが瓜子をかじる音で、皆が食べ終わったことが分かる。シスターは皆が食べ終わるのを待って鈴を鳴らし、順番に並んで「お散歩」に行かせた。私は一碗食べて終わりにしようとしたが、大姐は私が小食なのを許さなかった。ある時など人づてに練乳を買い求め、私の粥に入れて冷ますためにかき混ぜた。それを食べさせられた時はむかむかして吐きたくなった。それでも逆らわずに二碗を食べた。実は慌てる必要などまったくなかった。生徒たちがものを食べられるのは食堂内だけだったからだ。チビ助たちはこっそりと美味しいものを隠し持つっており、シスターたちは気が付かなかった——あるいは気づかぬふりをしていた。生徒たちの多くは様々な「旨いもの」を持っている。地元上海の生徒は家から学校におかずを持参して食べた。いずれにしろ食べ物や食堂の両壁の戸棚にしまわれ、食堂でしか口にすることは許されなかったのだ。生徒たちは私が食べる速度が遅いのを利用して、こういったおやつを食べることができた。毎日の朝食では食べ終えるのは私がいともびりだった。

注

(1) 原題「難忘的一天」。底本は『楊絳文集』(第三卷、散文卷下、人民文学出版社、二〇〇四年)に収録。『楊絳文集』第八卷最後に掲載された「楊絳生平与創作大事記」では執筆が二〇〇二年三月二十八日と誤記されている。『楊絳文集』第十卷 訳文卷(人民文学出版社、二〇二二年)では二〇〇一年十月一〇日に訂正されている。

(2) 原題は「我在啓明上学」。底本は『楊絳文集』注(1)前掲書収録。

(3) 一九八〇年末「幹校六記」を脱稿、その後香港の雑誌「広角鏡」一九八一年四月十三日に掲載、同年五月に香港三聯出版社より刊行。北京三聯書店からの刊行は同年七月。邦訳「幹校六記」(一九八五)は中島みどり訳。

(4) 初出は「回憶我的父親——一份資料」「当代」（人民文学出版社、一九八三年第五期、第六期）、その後、湖南人民出版社、駱駝叢書の一冊「回憶一篇」に叔母の思い出（「回憶我的叔母」）と共に収録。邦訳「父の回想」は注（3）前掲邦訳書に収録。

(5) 楊絳とその父、夫との関係については拙論、櫻庭（一九九九）で論じたことがある。

(6) 楊蔭杭についての言及は、早い時期では馮自由（一八八二—一九五八）が『逸経』半月刊（一九三六年第十期、二一八頁）に掲載した「勵志会與譯書彙編」（のち『革命逸史』（一九三五）の影印版、台湾商務院書館、一九六九年に収録）で「譯書彙編」は江蘇出身の楊廷棟、楊蔭杭、雷奮等が中心となり、欧米の法政の名著を編訳することを旨としルソアの『民約論』『社会契約論』、モンテスキューの『萬法精理』『法の精神』、ジョン・ミルの『自由言論』『自由論』スペンサーの『代議政體』『政治進化論』？を順次掲載し、その訳文は流麗典雅で一世を風靡し、留學生雑誌の元祖と言わしめた」と紹介している。楊絳（一九八三）での楊蔭杭の紹介は当初中国科学院近代史研究所の要請を受けて書かれたものだが、それでも馮自由『革命逸史』に言及している。その後、清末民初の翻訳研究が蓄積されるにつれ、楊蔭杭及び『譯書彙編』に関する研究も増えている。例えば、鄒振環（一九九三）は、楊蔭杭をはじめ訳書彙編社のメンバーの翻訳分野での貢献を簡潔かつ端的に指摘している。『譯書彙編』（影印版）第一期の目次を見ると、日本語から重訳と思われるが、（米）伯蓋司「J. W. バージェス」「政治学」、（独）伯倫知理「ブルンチユリ」「国法概論」「加藤弘之抄訳『国法凡論』か」と「政党論」、（独）海留司烈「ヘルマン・リヨースレル」「社会行政法論」「国立国会図書館デジタルコレクションで見られるものは、江木衷訳、警視庁出版、明治一八年」、（仏）孟德斯鳩「モンテスキュー」「万法精理」「何礼之訳、一八七五年」、（仏）盧騷「ルソー」「民約論」「教育論」、（独）伊耶陵「ルードルフ・フォン・イヤリング」「権利競争論」「宇都宮五郎重訳、一八九三年」が掲載され、日本語からの直訳として、鳥谷部鉄太郎「政治学提綱」、有賀長雄「近世政治史」「近時外交史」、の書名を見ることができ。鄒振環（一九九三）によると、日本語からの重訳で洪江保『ポーランド衰亡戦史』、高田早苗『国家学原理』等も掲載されているという。楊蔭杭が「物競論」と題して翻訳した加藤弘之の『強者の権利の競争』（日本哲学書院、一八九三年）については、魯迅も目を通していたことが周作人の日記から知れることを劉伯青（一九八五）が指摘し、李

冬木（一九九八）が該当箇所を紹介している。一九九六年刊行の『周作人日記』一九二〇年一月三十日の記載では以下のようになっている。「（…）又大哥函并小棉袄一件大簍一个塩一瓶外又書一縛内係大日本加藤弘之物競論瀝江保波蘭衰亡戰史各一冊皆洋裝可喜之至斯密亞丹原富甲乙平三本亦佳（…）」。宋曉焯（二〇一七）は加藤弘之著『強者の原理の競争』と楊蔭杭訳『物競論』を比較検討し、『物競論』が当時の中国人に歓迎された理由を「加藤の『強者の権利の競争』が説く優勝劣敗思想の刺激を最大限保持したうえで、そこに革命派のメッセージを込めて翻訳したのだと論じている。王曉鑫（二〇一九）は『訳書彙編』翻訳メンバーの一人楊廷棟の『路索民約論』と楊蔭杭の『物競論』それぞれを原文と比較検討し、『物競論』についてはほぼ宋曉焯（二〇一七）の論文に依りながら「楊蔭杭訳『物競論』が中国のエリートたちの進化論を受容する一つのルートであった」と結論付けている。『訳書彙編』については、郭夢垚（二〇一九）（二〇二二）（二〇二二）に詳しい。楊蔭杭の著作としては、翻訳編集のほかは、一九二〇年代上海『申報』社説欄、『時報』の「上下春秋」に発表した論評をまとめた『楊蔭杭集』上下（楊絳整理、中華書局二〇一四年三月）が「中国近代人物文集叢書」の一冊として刊行されている。収録されている「漢文」「小説と翻訳」等は楊絳の翻訳創作姿勢を考える上でも興味深い。楊蔭杭の経歴について『楊蔭杭集』に附された「作者略歴」及び、宋曉焯（二〇一七）、その他「回憶我的父親」等よりまとめたものを以下に紹介しておく。

楊蔭杭（一八七八—一九四五）江蘇省無錫生まれ。一八九五年、天津中西学堂「後の北洋大学堂」入学。学生騒動に巻き込まれて退学、一八九七年南洋公学に転学、一八九八年唐須菱（楊絳の母）と結婚。宋曉焯によると、楊廷棟とともに翌一八九九年、官費留学生として日本に派遣され、まず日華学校に入学、同年九月に東京専門学校「早稲田大学前身」に入学。一九〇〇年、楊廷棟、雷奮とともに勵志会を設立、「勵志会」本部の発起人且つ責任者であった東京専門学校の学友戡翼鞏（字、元丞）が最初の翻訳団体「訳書彙編社」を一九〇〇年十二月六日東京に設立するとその会員となり、同年、『訳書彙編』創刊、翻訳活動に従事。『訳書彙編』は月刊雑誌で初年は第九期、翌年は第十二期まで刊行。一九〇三年四月に『政法学』と改名。一九〇一年、楊蔭杭らは東京にて『国民報』を創刊。楊蔭杭は『訳書彙編』第四期（一九〇一年五月二十七日）と続く五期、八期（明治三四八月二十八日発行）に加藤弘之『強者の権利の競争』を訳し『物競論』として連載後、一九〇一年八月二十日に訳書彙編社から単行本として刊行。楊はそ

の後夏休みに一時帰国した際、無錫にて勵志会分会を組織。一九〇二年、早稲田大学本科を卒業し帰国。七月、雷奮、楊廷棟とともに南洋公学訳学館にて翻訳に従事。宋曉煜（二〇一七）は、ここで翻訳された六〇種余りの翻訳書『日本法規大全』には訳者の署名はないが、専門領域からしてこの編訳作業に携わったのは間違いないと推測している。一九〇二年に創刊された『大陸報』で主筆をつとめる。一九〇二年、上海作新訳書局（戩翼鞏が下田歌子と創設）から『物競論』修正版が再版、一九〇三年一月、上海作新図書局から三版が刊行。また邦訳の西洋論理学を主体としこれに中国古典の典故を入れて編集したものを「名学」と題して一九〇二年五月、『日新叢書』第一輯として東京日新叢編社から出版、これは同年『名学教科書』のタイトルで上海文明書局から刊行される。一九〇三年、訳学館が閉館。無錫に戻り、留日留學生の蔡文森、顧樹屏らと無錫で「理化研究会」を組織。上海『蘇報』社、『大陸報』（以前の『国民報』）で編集に従事。一九〇四年から一九〇五年にかけて新聞社での編集作業のほかに、中国公学、務本女高、澄衷中学にて教鞭を執る。一九〇五年夏、無錫に帰郷した際、埃実学堂にて民主革命を鼓吹する講演を行い、そのため清朝政府から指名手配される。一九〇七年日本にひそかに逃れ、九月に試験を経て早稲田大学法学院に入学、法律を専攻する。一九〇七年、論文を提出し早稲田大学法学士を取得、米國ペンシルベニア大学法学院に入学。一九一一年、ペンシルベニア大学にて法学修士号を獲得。修士論文『日本商法』（Commercial Code of Japan）は一九一一年米國にて出版。楊絳によるとこの論文は、日本の商法とそれが根拠としたドイツの商法及びそれが採用した欧州大陸系統の商法を比較し、（日本の商法の）特殊な箇所は日本の国情に合わせたためと指摘したものとのこと。鄒振環（一九九三）は、『日本商法』は、訳書院で『日本法規大全』の翻訳編集に携わった経験が生かされているとする。楊蔭杭は欧州その他の国を経て秋に帰郷する。一九一一年張謇の推薦で北京法政学院にて教鞭を執り、また清王朝肅親王善耆に法律を個人教授等するが、辛亥革命後に職を辞して南に戻り、上海『申報』館に勤め、同時に弁護士を兼任し、上海弁護士公会の發起人の一人となる。一九一三年、張謇の推薦で江蘇省高等審判庁長兼司法籌備処処長に任じられ蘇州に移る。一九一四年、浙江省高等審判庁長に転任、杭州に移る。一九一五年から一九一九年にかけて北京に転勤し、京師高等審判庁長、司法部参事を兼任。一九一九年職を辞し無錫に帰郷、大病を患う。一九二〇年、上海『申報』館で副編集長を務め同時に弁護士を兼任する。同年秋に一家で上海に移る。一九二三年、蘇州に移り弁護士

業を開業、旺盛な執筆活動が展開される。一九二四年蘇州の廟堂を購入し改修して住まいとする。一九三四年軽い卒中を起こし弁護士業を停止。一九三七年、日本軍の蘇州侵略により末娘楊必と妻を伴って香山に避難。避難中の十一月、妻が病死。一九三八年、上海に避難。上海震旦女子文理学院にて教鞭を執る。一九四一年、震旦女子文理学院の職を錢鍾書に譲る。一九四五年三月二七日、日中戦争終結前に蘇州の自宅にて卒中で死去。

(7) 娘の錢媛（一九三三—一九九七。阿圓）と夫の錢鍾書（一九一〇—一九九八）の死について寓話の手法と回想でその喪失の悲しみを描いたものが『我們仨』（北京：三聯書店、二〇〇三）。邦訳（二〇一三）『別れの儀式——楊絳と錢鍾書 ある知識人一家の物語』櫻庭ゆみ子訳、勉誠出版。

(8) 李清悚・顧岳中編（一九八二）附表一「天主教在上海設立的教会中学」によると、啓明女学校は「フランス「天主教拯亡会」一九〇四年創立。天鑰橋路一〇〇号、初め啓明女校、のち啓明女子中学」「一九五二年八月に女滙女子中学に併合して滙明女子中学と改名、同月、上海市第四女子中学に改名、上海第四中学と改められ、現在に至る」とある。楊絳の在籍期間は一九二〇年秋から一九二三年夏まで。データベースによる資料、「徐家滙啓明女校二十五周年記念」〔聖教雜誌〕「近時 教育新聞」一九三〇年（第十九卷第一期、四十二頁—四十六頁）に創立の経緯から二十五周年までの詳細な紹介が載っている。それによると、一九〇三年務本女学校校長であった呉懷疚（？—一九一八）が務本女学校の学生の一部を徐家滙聖母院に転学させ、崇徳女校の部屋の一部を借りて宿舍とし、震旦の校長、李問漁司祭が学校の規則を起草し啓明と名付け、啓明女校が始まったという。李問漁司祭については周明明（二〇一三）に紹介がある。「徐家滙啓明女校二十五周年記念」をもとに創設から一九二九年末までの状況を以下にまとめてみる。まず一九〇三年創設時に国文、フランス語、英語、理科、算術、音楽、絵画、体操といった諸科目が設けられ、一九〇四年十月十日に正式に授業が開始される。一九〇五年五月九日には第一回遊芸会が開催。学生のピアノ演奏、英語、フランス語、各種体操のパフォーマンスに観衆が感嘆したという。一九〇六年学生数は五十人に増え、秋学期会後期には入学希望者は百名を超え、従来の校舎では間に合わなくなったため、育嬰堂の一部を教室と宿舍に用いる。その後学生数は増加し続け、一九一四年、十周年を迎えた時は学生数は百六十数名に達し、教室、宿舍が手狭となったために募金を行い、更に十周年記念大会を開催し、上海各界の名士を招いて新校舎の必要性を認知してもらい献金を募

る。同年六月十四日に新校舎の建設に着工、一九一七年に新校舎が落成。一九二一年、楊絳が入学した翌年、学生数は二百七十名に達している。建物が手狭になり、校舎の左側に新たに食堂を増築し翌年六月竣工。一九二二年宿舎の増設工事を開始し、校舎の左右翼は二階建てであったが、その上に更に一階を設け三階建てとする。これは楊絳の回想と合致する。九月九日秋学期開始には三百四五十人を収容できる宿舎二部屋が増設される。この頃には啓明女学校の評判はさらに高まり、遠方からも入学希望があり、一九二三年の秋、学期初めには学生数は三百六十三人に達する。一九二四年八月、江浙戦争により退学する学生が多数出るが、一九二五年一月五日戦乱が終息すると学生数は元に戻る。一九二六年秋、状況が落ち着き、院長のシスター来華五十周年記念式典が盛大に催され、同窓生も子女を伴って参列、賓客は六百人余りに上ったという。一九二七年春、戦乱で学生数は一気に減少するが、一九二八年には軍、政界各要人の娘が多数入学するようになる。一九二九年十一月、創立二十五周年の祝賀大会が盛大に催され、フランス海軍司令官や陸伯鴻その他国内外の要人が多数訪れる。学生による英語劇、フランス語劇、中国語劇、ピアノ独奏、合奏等のパフォーマンスが行われ、当時の上海市長「張群？」が祝辞を述べている。またこの時、校友会を代表して一九一四年(?)卒業の楊寶康(楊絳の従姉)が祝辞を述べた。この記事が掲載された『聖教雜誌』については、周明明(二〇一三)に詳しい。務本女学校と呉懷疚との関係については杉本史子(二〇〇八)で言及がある。「良妻賢母を育てることを目的とし」「キリスト教系の学校に対抗し、日本の学校をモデルとした教育が行われ」ていた(杉本)という務本女学校と啓明女学校が強く結びついていたのは興味深い。

(9) 教会学校による高等教育についてはすでにそれなりに研究蓄積があり、二〇〇〇年以降のものとしては例えば、徐海寧著『中国近代教会女子大学辦学研究——以金陵女子大学為個案』(南京師範大学出版社、二〇〇八年)、陳晶著『上海基督教會女子音樂教育研究』上海音樂學院出版社、二〇一六年)等が詳細に論じている。中等教育については、英語教育を教科書の視点から論じた吳馳著『清末民初中小學英語教科書研究』湖南師範大学出版社、二〇一四年)も参考になる。以前拙論、櫻庭(二〇一六)で、林徽因が通った北京の英国国教会系教会学校、培華女学校について調査したものをまとめたことがある。カトリック系の啓明女学校とプロテスタント系の培華女学校では宗教教育の妥協点で態度が異なっている点を指摘しておく。

- (10) ジェンダーの視点を取り入れてこの問題を扱った論著として游鑑明著『運動場内外…近代華東地區的女子體育(1895-1937)』(台北:中央研究院近代史研究所、二〇〇九年)、教科書の視点からの研究として劉斌著『清末民国内小学体育教科書研究』(湖南師範大学出版社、二〇一四年)を挙げておく。
- (11) 「中文期刊全文數拠庫」慶應義塾大学所蔵データベース。
- (12) 現在見ることのできる「啓明女校章程」(以下「章程」とする)のうち、楊絳の在籍中(一九二〇—一九二三)に該当するものは『啓明女學校校友會雜誌』(一九二〇年 第一期、一八〇—一八八頁)掲載のものである。全部で二九項目を挙げ細かい規定が定められている。尚、朱有贇・高時良主編『中国近代学制史料』第四輯(華東師範大学出版社、一九九三年、二二七—二九頁)掲載の「私立啓明女子中學校章程」は一九三八年のもの。
- (13) 楊寿康(二八九九—一九九五)フランス語に堪能。カトリックの洗礼を受けている。
- (14) 楊閻康(一九〇六—一九九四)。夫は何徳奎(一八九六—一九八三、ハーバードで修士号、一九三〇年代より上海工部局華人事務所の責任者)上海在住。楊絳の家譜については、施曉平「夏夢与蘇州」二〇一七年二月一日「蘇州大講壇」<http://www.szlib.com/DR/SuzhouForums/Content/731>の紹介による。
- (15) 楊絳は楊蔭杭、唐須嫠(一八七八—一九三七)夫婦の第四女。第三女の楊同康は啓明在学中に病で死亡。楊絳の下に以下の弟妹がいる。長男、楊宝昌(一九一三—一九三〇、十七歳で肺結核で死亡)、次男、楊保俶(一九一四—二〇一?)同濟大学教務主任、この文章の「弟」である)、五女、楊泰(一九一六—一九八二、夫は文革中に自殺する天津大学図書館長孫令衡)、第六女、楊必(一九二二—一九六八、錢鍾書の指導のもとにサッカレー『名利場』(邦題『虚栄の市』)を翻訳。楊絳は「記楊必」(楊絳一九九三収録)の他に、二〇一四年に『名利場』の細かい修正を行った『名利場点煩』(人民文学出版社)を刊行し、最晩年まで利発な末の妹の早すぎる死を悼んだ。阿必は呼称。
- (16) 太倉から蘇州までは百キロ弱。道半ばというところだが、当時の路線は未確認。
- (17) この時楊絳は娘とともに辣斐德路「ラファイエット路、現在の復興中路」にある錢鍾書の実家に身を寄せていた。
- (18) 注(12)前掲資料で挙げた「章程」の宗旨に次のようにある。
 「(一) 規則は厳守すること。学業に専心するため緊急の事態でない限り外出は認めない。(二) 学生の操行及び成

績を随時点検する。(三) 毎週ごとに点数を公表し、毎学期ごとの点数を父兄のもとに送付し学校生活において勤勉か否かを知らせる。「本校は学生が集中して勉学に励むよう毎月及び学期末に試験を行う。毎月一回筆記試験を、学期末に筆記試験と口頭試験をそれぞれ一回行う。夏休みに際し各学生の一年間の成績評価を行い表彰状を授与する。」また「本校は信者ではない女子のみを受け入れ信者の女子学生とは完全に分離する。もし学生の中で公教要理を学びミサに参加したいと思う者は、父母にその旨を明確に告げ許しをもらった場合のみこれを許可する。」ともあり、国民党政府側の宗教対策への対応を図っている点は興味深い。

「章程」第六項目に挙げた校則は以下のようにかなり細かく規定している。

「六、学生は在校時に以下の規則を遵守すること。故意に違反し、あるいは違反を繰り返し改めないものは家に送還する。(甲) 服装は質素であること。派手なものや短すぎたり狭すぎることがないように。十六歳から十八歳まで鬘を結いスカート着用の事。(乙) 挙止言動は上品で落ち着いたものであること。軽佻浮薄とならないこと。(丙) 家から送り届けられた物は一律女性の教員を通じて手渡される。手紙は女性の教員がまず開封する。ただし父親から娘夫から妻への手紙はこの例ではない。(丁) 校内にて画報の閲読は許可しない。校内に買い置きしてはならない。小説その他禁書の類は見つけ次第没収し、返却はしない。(戊) 親族との面会は規定の時間を守り、学業に支障を来さないようにすること。授業中の面会は許可しない。(乙) 学生は校内では整頓清潔さを保ち、痰ツボを使い、床を汚さないこと。(庚) 校内ではゆっくり歩き秩序を守りみだりに走り回らないこと。(辛) 他人の引き出しを開けないこと。(壬) 平日は決められた時間以外は食べ物や口に入れてはならない。教室やベッドルームに食べ物や飲み物を置いてはならない。魚肉スープ等の料理は学校に持ってきてはならない。塩漬け卵や漬物等、もし家から届けられたならば使用人を通じて食堂の管理者に届けること。(癸) 銀銭及び服、装飾品などは互いに貸し借りしてはならない」。

「十六、学費及び食費、寮費は毎年七十元。西文(英語かフランス語を選択)選択者は更に二十元。西琴「ピアノ」及び味奥隆(すなわち四弦琴「ウクレレ」)を選択するものは毎月更に五元。(年五十元) デッサンと油絵を選択する者は毎月二元(年二十元)。書籍や絵の具紙筆及び衣料の洗濯費用は各自で負担。毎学期ごとに校役費「雑費」

- 一元を支払うこと。」十七 学費及び食膳寮費雜費などの費用は入学時に一学期分を支払うこと。規則に従わず退校処分を受けた以外の中途退学者には返金しない。」郭沫若自伝的小説「月蝕」(一九二三年九月作)で「上海の静安寺から呉淞の海岸まで一日貸し切りのセダン往復で九元」とある。これから推定すると啓明女学校の学費は高額である。
- (19) 「父方の二番目のおば」の意。楊蔭杭の妹、楊蔭枌。楊蔭楡の姉。
- (20) 「父方の従姉」、楊蔭杭の兄楊蔭桓(二八七五—一九〇一、湖北武備学校の実習事故で亡くなったため、楊蔭杭が二人の子供を引き取って面倒を見ていた)の長女、楊寶康。注(8) 前掲資料にある二十五周年記念で記念の祝辞を述べた従姉である。
- (21) 大王廟小学校のこと。楊絳は「大王廟」(『雜憶與雜寫』生活・讀書・新知三聯書店、一九九四年)でこの旧式の学校での生活を懐かしさを込めて描写している。
- (22) 注(8) 前掲資料「徐家滙啓明女校二十五周年紀念」では、「一九二二年学生数が二百七十余名になったため校舎の左側に新たに食堂が建設され、その後二階建ての宿舍の上に三階部分に寢室用の大部屋が増設され、一九二二年秋より三百五十人余りを収容できるようになった。」とある。
- (23) 「章程」の第十一と十二に次のようにある。
- 「十一、上海で伝染病が発生していない場合、陽曆毎月第一日曜日に学生は実家に戻ってもよい。家族または使用人が迎えに来ること。或いは家族のものがあらかじめ手紙にて学生の帰宅方法を告げた場合は許可を与える。(学校を出る時刻は前日、すなわち土曜日午後四時以降、学校に戻る時刻は日曜日の午後六時以前とすること)」「十二、祝日、日曜日及び郊外旅行の際に学生は必ず制服を着用すること。制服は制服代を学生が支払い、本校が一律注文する。よって新入生は入学直後に身体の寸法を記入し制服を注文すること。(体格の大きい者は五元半、小柄な者は五元)学生は青い制服を着用する時は必ず元色〔原色〕のズボンかスカートをはくこと。夏季は白い制服を着用すること。」
- (24) 「章程」では第十八項目に挙げた「日課」に以下のように規定している。
- 十八 校内での日課は以下のとおりである。

六時起床、身支度及び朝食。

八時から十二時は中文、西文「外国語」の授業。科学。算術。あるいは自習。

十二時から一時半まで昼食その後で「休憩」。休憩時には必ず散歩をすること。一時から席に着き始めること。一時半から四時半まで英語フランス語の歌唱。刺繍クラス、図画、西楽「音楽」及び習字。

四時半から五時までおやつ休憩。
五時から六時まで中文授業。

六時から七時まで自習。中西文学、算数の復習。新しい授業の予習。

七時から八時、夕食と休憩。

八時から読書。小学生は八時に就寝。

八時半、全校就寝。

親族との面会は十二時半から午後二時半、または四時半から五時の休憩時間のみを厳守し、延長は認められない。日曜日及び水曜日の午後はこの例にあらず。

また授業科目にかかわる項目十九から二十六までを参考に挙げておく。

十九、毎日の授業と自習のほかに模写一時間、鉛筆或いは柳条画を一時間、雑芸が一時間。

二十、毎週修身倫理の授業を一時間、体操一時間、唱歌一時間、保健衛生一時間、また家政学を一時間か一時間半。

二十一、音楽の授業は、学生のレベルによって決められる。但し年齢が十六歳以上のものはピアノを学ぶのはふさわしくない。

二十二、西文を選択しないものは科学の授業を各種選択できる。中文、西文を共に選択している者は科学の科目から一科目を選択できる。

二十三、毎年前期、すなわち夏休みの後に西文の新しいクラスを開講する。後期には開講しない。しかし他校ですでに西文を学んでいる者は編入できる。ただしフランス語は前期後期ともに新たなクラスを開講する。また本校は学生家族の希望により第二学期から普通科のほかにフランス語会話の授業を設ける。

二十四、中文と外文の双方を選択している学生は、毎日西文を二時間、一時間は授業、一時間は復習に当てる。中文の基礎ができている者は毎日外国語の授業を二時間受ける。国文「中国語」の基礎の上に西文は位置づけられる。もし父兄より別の意見がある場合は相談により変更可能である。

二十五、学生は授業に出る際は振鈴とともに教室に入っていなければならない。授業中は必ずきちんと座り静かに聴くこと。私語や大声で笑ったりしないこと。みだりに質問をしないこと。他の本を隠れて読まないこと。先生に説明や暗誦を求められた場合は学生はすぐに応えること。

二十六、自習時間におしゃべりをしないこと。編み物をしたり絵をかいいたりしないこと。用なく寝室に入らないこと。日曜日のみは適宜習字などをしてよい。

(25) 「章程」の第五に「学生が来校する際は夜具及び身の回り品、蚊帳（白色、長さ五尺、幅二尺半）洗面器と足洗たらい、櫛、ベッド用白い敷布を持参すること。但し校内にて購入も可。高価な装飾品及び金銭は持つてこないこと。違反して紛失があった場合、学校側はその責を負わない」とある。

(26) 「女校生活」『近代婦女』一九三〇年（第十三期、九頁）に当時の食堂の写真が掲載されている。

参考文献

馮自由（一九六九、一九七六）『革命逸史第一集』台湾商務院書館股份有限公司。一九七六年十一月第三版。

郭夢垚（二〇一九）「清末中国人日本留学生の初期活動について——勵志会と訳書彙を中心に」孫安石、大里浩秋編著『中国人留學生と「国家」、「愛国」、「近代」』東方書店。

(二〇二二)「清国留學生會館の設立と勵志会・訳書彙編社との関係について」『中国研究月報』七五（十二）、二十一—三十九頁。

(二〇二二)「清国留學生と『訳書彙編』の発行」孫安石、大里浩秋編著『明治から昭和の中国人日本留學の諸相』東方書店。

李清悚・顧岳中編（一九八二）『帝國主義在上海的教育侵略活動資料簡編』附表一、二、上海教育出版社、七七頁、八四頁。
李冬木（一九九八）『滬江保訊《支那人氣質》与魯迅（上）——魯迅与日本書之二』、『関西外国語大学短期大学部編研究論集』六七、二六九—二八六頁。

（二〇〇一）『關於《物競論》』、『中国語源文化研究』（二）、二三—三八頁。

劉柏青（一九八五）『魯迅與日本文學』吉林大學出版社。

宋曉煜（二〇一七）『清末における加藤弘之の著作の翻訳及び受容狀況——「強者の権利の競争」とその中国語訳を中心に』、『ICCS 現代中国学ジャーナル』十（二）、八九—一〇六頁。

王曉鑫（二〇一九）『西学東漸』における清末留日学生の翻訳活動——訳書彙編社への考察を中心に』、北京外国語大学修士學位論文。

吳相湘主編、坂崎斌編集（一九六六）『譯書彙編』影印本、中国史學叢書、台灣學生局（『譯書彙編』第一期、第二期、第七期、第八期を一冊にまとめたもの）。

楊絳（一九八三）『回憶我的父親』、『記楊必』、『楊絳作品集2』中国社会科学出版社。

（一九八五）『幹校六記』中島みどり訳、みすず書房。

鄒振環（一九九三）『辛亥革命前楊蔭杭著訳活動述略』、『蘇州大学学报哲学社会科学版』一。

（二〇〇八）『影響中国近代社会的一百種譯作（修訂版）』江蘇教育出版社。

周作人（一九九六）『周作人日記』、鄭州·大象出版社、一九九六年。

周明明（二〇一三）『《聖教雜誌》視野下的上海天主教学校（1912-1938）』、上海社会科学院研究生卒業學位論文。

櫻庭ゆみ子（一九九九）『楊絳』小谷一郎、佐治俊彦、丸山昇編『転形期における中国の知識人』汲古書院、三八五—四四頁。

（二〇一六）『林徽因と培華女学校』関根謙編『近代中国 その表象と現実』平凡社、四十一—八十頁。

杉本史子（二〇〇八）『辛亥革命期の湯国梨と務本女塾——女性教員、女性運動家として』、『立命館文學』（六〇八）、二三—二四五頁。